太宰治全集

1

筑摩全集類聚

筑摩書房

太宰治全集第一卷

筑摩全集類聚

昭和五十年六月二十日　初版第一刷發行
昭和五十五年八月十五日　類聚版第四刷發行

著者　太宰治

發行者　布川角左衛門

東京都千代田區神田小川町二ノ八

發行所　筑摩書房

郵便番號　一〇一―九一一
電話　東京(291)七六五一(營業)
　　東京(291)六七一一(編集)
振替　東京六―四一二三

印刷　株式會社精興社
製本　株式會社積信堂

(分類) 0393 (製品) 71901 (出版社) 4604

目

次

晩年

葉……五
思ひ出……三
魚服記……六五
列車……七六
地球圖……八一
猿ケ島……九一
雀こ……一〇二
道化の華……一〇八
猿面冠者……一六四
逆行……一八四
彼は昔の彼ならず……二〇二
ロマネスク……二四六

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

玩具……二七二
陰火……二八〇
めくら草紙……三〇一
ダス・ゲマイネ……三一三
雌に就いて……三四五
虚構の春……三五五
狂言の神……四二九
解題……四五一
校異……四六六

太宰治全集　第一卷

晚

年

葉

撰ばれてあることの
恍惚と不安と
二つわれにあり

ヴエルレエヌ

死なうと思つてゐた。ことしの正月、よそから着物を一反もらつた。お年玉としてである。着物の布地は麻であつた。鼠色のこまかい縞目が織りこめられてゐた。これは夏に着る着物であらう。夏まで生きてゐようと思つた。

ノラもまた考へた。廊下へ出てうしろの扉をばたんとしめたときに考へた。歸らうかしら。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

私がわるいことをしないで歸つたら、妻は笑顔をもつて迎へた。

その日その日を引きずられて暮してゐるだけであつた。下宿屋で、たつた獨りして酒を飲み、獨りで醉ひ、さうしてこそこそ蒲團を延べて寢る夜はことにつらかつた。夢をさへ見なかつた。疲れ切つてゐた。何をするにも物憂かつた。「汲み取り便所は如何に改善すべきか?」といふ書物を買つて來て本氣に研究したこともあつた。彼はその當時、從來の人糞の處置には可成まゐつてゐた。

新宿の歩道の上で、こぶしほどの石塊(いしころ)がのろのろ這つて歩いてゐるのを見たのだ。石が這つて歩いてゐるな。たださう思うてゐた。しかし、その石塊(いしころ)は彼のまへを歩いてゐる薄汚い子供が、絲で結んで引摺つてゐるのだといふことが直ぐに判つた。

子供に欺かれたのが淋しいのではない。そんな天變地異をも平氣で受け入れ得た彼自身の自棄(やけ)が淋しかつたのだ。

そんなら自分は、一生涯こんな憂鬱と戰ひ、さうして死んで行くといふことに成るんだな、と思へばおのが身がいぢらしくもあつた。青い稻田が一時にぽつと霞んだ。泣いたのだ。彼は狼狽へだした。こんな安價な殉情的な事柄に涕を流したのが少し恥かしかつたのだ。

電車から降りるとき兄は笑うた。

「莫迦にしよげてるな。おい、元氣を出せよ。」

さうして龍の小さな肩を扇子でポンと叩いた。夕闇のなかでその扇子が恐ろしいほど白つぽかつた。

龍は頬のあからむほど嬉しくなつた。兄に肩をたたいて貰つたのが有難かつたのだ。いつもせめて、これぐらゐにでも打ち解けて呉れるといいが、と果敢なくも願ふのだつた。

訪ねる人は不在であつた。

兄はかう言つた。「小説を、くだらないとは思はぬ。おれには、ただ少しまだるつこいだけである。たつた一行の眞實を言ひたいばかりに百頁の雰圍氣をこしらへてゐる。」私は言ひ憎さうに、考へ考へしながら答へた。「ほんたうに、言葉は短いほどよい。それだけで、信じさせることができるならば。」

また兄は、自殺をいい氣なものとして嫌つた。けれども私は、自殺を處世術みたいな打算的なものとして考へてゐた矢先であつたから、兄のこの言葉を意外に感じた。

白狀し給へ。え？　誰の眞似なの？

水到りて渠成る。

彼は十九歳の冬、「哀蚊」といふ短篇を書いた。それは、よい作品であつた。同時に、それは彼の生涯の渾沌を解くだいじな鍵となつた。形式には、「雛」の影響が認められた。けれども心は、彼のものであつた。原文のまま。

をかしな幽靈を見たことがございます。あれは、私が小學校にあがつて間もなくのことでございますから、どうせ幻燈のやうにとろんと霞んでゐるに違ひございませぬ。いいえ、でも、その青蚊帳に寫した幻燈のやうな、ぼやけた思ひ出が奇妙にも私には年一年と愈々はつきりして參るやうな氣がするのでございます。

なんでも姉様がお婿をとつて、あ、ちやうどその晩のことでございます。御祝言の晩のことでございました。藝者衆がたくさん私の家に來て居りまして、ひとりのお綺麗な半玉さんに紋附の綻びを縫つて貰つたりしましたのを覺えて居りますし、父様が離座敷の眞暗な廊下で脊のお高い藝者衆とお相撲をお取りになつていらつしやつたのもあの晩のことでございました。父様はその翌年お歿くなりになられ、今では私の家の客間の壁の大きな御寫眞のなかに、おはひりになつて居られるのでございますが、私はこの御寫眞を見るたびごとに、あの晩のお相撲のことを必ず思ひ出すのでございます。私の父様は、弱い人をいぢめるやうなことは決してなさらないお方でございましたから、あのお相撲も、きつと藝者衆が何かひどくいけないことをなしたので父様はそれをお懲しめになつていらつしやつたのでございませう。

それやこれやと思ひ合せて見ますと、確かにあれは御祝言の晩に違ひございませぬ。ほんたうに申し譯がございませぬけれど、なにもかも、まるで、青蚊帳の幻燈のやうな、そのやうな有様でございますから、どうで御滿足の行かれますやうお話ができかねるのでございます。てもなく夢物語、いいえ、でも、あの晩に哀蚊の話を聞かせて下さつたときの婆様の御めめと、それから、幽靈、とだけは、あれだけは、どなたがなんと仰言つたとて決して決して夢ではございませぬ。夢だなぞとおろかなこ

と、もうこれ、こんなにまざまざ眼先に浮んで參つたではございませんか。あの婆様の御めめと、それから。

さやうでございます。私の婆様ほどお美しい婆様もそんなにあるものではございませぬ。昨年の夏お歿くなりになられましたけれど、その御死顔と言つたら、すごいほど美しいとはあれでございませう。白蠟の御兩頰には、あの夏木立の影も映らむばかりでございました。そんなにお美しくていらつしやるのに、緣遠くて、一生鐵漿をお附けせずにお暮しなさつたのでございます。

「わしといふ萬年白齒を餌にして、この百萬の身代ができたのぢやぞえ。」

富本でこなれた澁い聲で御生前よくかう言ひ言ひして居られましたから、いづれこれには面白い因緣でもあるのでございませう。どんな因緣なのだらうなどと野暮なお探りはお止しなさいませ。婆様がお泣きなさるでございませう。と申しますのは、私の婆様は、それはそれは粹なお方で、つひに一度も縮緬の縫紋の御羽織をお離しになつたことがございませんでした。お師匠をお部屋へお呼びなされて富本のお稽古をお始めになられたのも、よほど昔からのことでございましたでせう。私なぞも物心地が附いてからは、日がな一日、婆様の老松やら淺間やらの咽び泣くやうな哀調のなかにうつとりしてゐるときがままございました程で、世間様から隱居藝者とはやされ、婆様御自身もそれをお耳にしては美しくお笑ひになつて居られたやうでございました。いかなることか、私は幼いときからこの婆様が大好きで、乳母から離れるとすぐ婆様の御懷に飛び込んでしまつたのでございます。もつとも私の母様は御病身でございました故、子供には餘り構うて呉れなかつたのでございます。父様も母様も婆様のほんたうの御子ではございませぬから、婆様はあまり母様のはうへお遊びに參りませず四六

時中、離座敷のお部屋にばかりいらつしやいますので、私も婆様のお傍にくつついて三日も四日も母様のお顔を見ないことは珍らしうございませんでした。それゆゑ婆様も、私の姉様なぞよりずつと私のはうを可愛がつて下さいまして、毎晩のやうに草双紙を讀んで聞かせて下さつたのでございます。なかにも、あれあの八百屋お七の物語を聞いたときの感激は私は今でもしみじみ味ふことができるのでございます。そしてまた、婆様がおたはむれに私を「吉三」「吉三」とお呼びになつて下さつた折のその嬉しさ。らむぷの黄色い燈火(ともしび)の下でしよんぼり草双紙をお讀みになつていらつしやる婆様のお美しい御姿、左様、私はことごとくよく覺えてゐるのでございます。

とりわけあの晩の哀蚊の御寢物語は、不思議と私には忘れることができないのでございます。さう言へばあれは確かに秋でございました。

「秋まで生き殘されてゐる蚊を哀蚊と言ふのぢや。蚊燻しは焚かぬもの。不憫の故にな。」

ああ、一言一句そのまんま私は記憶して居ります。婆様は寢ながら滅入るやうな口調でさう語られ、さうさう、婆様は私を抱いてお寢になられるときには、きまつて私の兩足を婆様のお脚のあひだに挾んで、溫めて下さつたものでございます。或る寒い晩なぞ、婆様は私の寢卷をみんなお剝ぎとりになつておしまひになり、婆様御自身も輝くほどお綺麗な御素肌をおむきだし下さつて、私を抱いてお寢になりお溫めなされてくれたこともございました。それほど婆様は私を大切にしていらつしやつたのでございます。

「なんの。哀蚊はわしぢやがな。はかない……」

仰言りながら私の顔をつくづくと見まもりましたけれど、あんなにお美しい御めめもないものでご

ざいます。母屋の御祝言の騒ぎも、もうひつそり靜かになつてゐたやうでございましたし、なんでも眞夜中ちかくでございましたでせう。秋風がさらさらと雨戸を撫でて、軒の風鈴がその度毎に弱弱しく鳴つて居りましたのも幽かに思ひだすことができるのでございます。ええ、幽靈を見たのはその夜のことでございます。ふつと眼をさまして、おしつこ、と私は申しましたのでございます。婆様の御返事がございませんでしたので、寢ぼけながらあたりを見廻しましたけれど、婆様はいらつしやらなかつたのでございます。心細く感じながらも、ひとりでそつと床から脫け出しまして、てらてら黑光りのする欅普請の長い廊下をこはごはお厠のはうへ、足の裏だけは、いやに冷や冷やして居りましたけれど、なにさま眠くつて、まるで深い霧のなかをゆらりゆらり泳いでゐるやうな氣持ち、そのときです。幽靈を見たのでございます。長い長い廊下の片隅に、白くしよんぼり蹲くまつて、かなり遠くから見たのでございますから、ふゐるむのやうに小さく、けれども確かに、確かに、姉様と今晩の御婿様とがお寢になつて居られるお部屋を覗いてゐるのでございます。幽靈、いいえ、夢ではございませぬ。

藝術の美は所詮、市民への奉仕の美である。

花きちがひの大工がゐる。邪魔だ。

それから、まち子は眼を伏せてこんなことを囁いた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.